愛隣館研修センターニュース

〒612-8141 京都市伏見区向島二ノ丸町 151　Tel:075-621-3849　Fax:075-621-1579
E-mail:airinday@sunny.ocn.ne.jp　http://www.airinkan.net　振替:01020-5-39321
編集発行所:社会福祉法人イエス会 愛隣館研修センター　発行責任者:平田 義

112号

いのちが大切にされる社会をつくりだす！

平田　義

ウクライナで戦争が起こっています。人の命が蔑ろにされています。絶対に許されません。戦争が起きれば、生きるに値する命とそうでない命が選別されます。今の日本は戦争状態ではありません。しかし、日本では、障がいのある方の命が「生きる価値のないいのち」として、抹殺される「相模原事件」が起き、また、自らが生きる希望を失い、ALS患者嘱託殺人事件が起きています。私たちは、人の「いのち」のあり様は、一人一人違っていて当たり前だと思います。今号では、障がいのある方の「いのち」について」共に考える機会としました。

いのちをめぐる課題

京都市北部障害者地域生活支援センター「きらリンク」　土屋 健弘

近年いのちをめぐるとても重たい課題が、私たちの日常の仕事の中で突き付けられている。1つ目は京都市内で起きた生きることを悲観したALSの患者に対する嘱託殺人事件、2つ目は京都市左京区で生じた行動障害をともなう子どもの将来を悲観した親による殺人事件、3つ目は大きく立派な病院の中で生じた延命治療拒否同意書をめぐる事案等があった。その中でも、今回は、極めて巧妙で、悪意が見えにくく、しかしながらとても深刻で、かつ誰でもがそのような状況に直面するであろう3つ目の課題について私見も交えて書いてみたい。

近年の医療現場では、「私の治療を信じなさい。いうことを聞かないなら私の元を去りなさい。」といった医師の態度や文化への反省からか、丁寧に説明を行い文書で本人の同意をとる機会が増えてきている。十分な説明による同意に基づく医療と呼ばれるものである。これは私たちにとってはとても望ましい医療の姿のように見える。しかし、その延長線として「延命治療拒否同意書」なるものが、多くの医療機関で導入され始めている。標準的な医療は、現在も健在で、できる限り患者の「いのち」を救うために最善を尽くすというのが、それである。それでいいはずなのに、なぜ「延命治療拒否同意書」なる文書が登場したのであろうか？

それには、「尊厳死」という言葉が隠されている。「尊厳死」とは、「尊厳ある人生」を送りたいという人々の気持ちがあり、その「尊厳ある人生の最後のステージ」での選択が、どのように「尊厳ある死」を迎えるのかに行きつく。だからこそ、「尊厳ある死」を迎えるために医療はそれを尊重しなくてはならないし、それを自分の意思として文書にて表明しておくことが重要である。それが「リービングウィル」である。そして、その「リービングウィル」に基づいた医療こそが、Advance Care Planning(ACP)

であり、そのリービングウィルの確認書類の一つが「延命治療拒否同意書」である。この同意書があった場合のみ、延命治療の不開始という標準的医療に反する医療者の態度は非難されない。なぜなら、これこそが患者中心の素晴らしい医療なのだからというのが、積極派の主張のようである。そしてリービングウィルもACPも必ず「気持ちが変われば、いつでも変更できます」と説明されている。ちなみに延命治療の恣意的な中断は法的には認められていないため、それを可能にしようと画策していた法律が「尊厳死法案」と呼ばれるものである。

この表向きのとても美しいコトバを前にした時、私自身も反対をする理由は見当たらない。しかし私は、この動きにうさん臭さを感じていた、そもそも「尊厳死」を推進したいと主張する団体の一つに「尊厳死協会」が存在しており、その「尊厳死協会」の前身は「安楽死協会」であり、その「安楽死協会」は、かつて障害のある方々を断種したり中絶することを推奨していた医師の存在が見え隠れする団体だったからである。もちろん、今もその影響下にあるのかどうかは知らないし、そもそも現在のACPの考え方を推奨する医療者が、その影響を受けているのかどうかも知らない。けれども、このような、「価値あるいのち」と「価値のないいのち」を選別しようとする立場と、とても親和性が高いだけに、その危険に気づきにくいことが、とても気持ち悪いのである。

そして実際に起こった。とても有名な大きな病院で。ある神経難病患者が入院時に大量の必要書類に記入した。そして退院を迎える際のカンファレンスで、主治医からこう言われた。「もし自宅に戻られても、救急車は呼ばないでください。救急搬送されても何もできませんので。それが患者の意思です。」と。その時に1枚の紙が示された。「延命治療拒否同意書」であった。そこには、「すべての延命治療（気管挿管、人工呼吸器の装着等）を拒否します」の欄に丸印がつけられていた。本人に確認したところ、人工呼吸器装着は嫌なので、そこに丸をした。けど死にたいわけじゃない。救急車で運ばれたら助けてほしいと。そして何より結婚したいのだと。さっそく医療機関に、その同意書の破棄を申し入れた。しかし、「そのような手続きはない。電子カルテに添付された書類を消去すること許されない。」と。新たに正しく記載しなおした「延命治療拒否同意書」の受け取りも拒否された。そして、当該主治医は既に別の病院に移っており、その経緯もわかりませんがお引き取り下さいと言われた。「全部嘘やんけ」「だましやんけ」「インチキやんけ」「ふざけんな」「なにがACPじゃ」「なにがいつでも変更できますじゃ」「死にたくない人殺されるやんけ」と次々と言葉が自分の頭を駆け巡った。彼は死にたくないので主治医医療機関を変更せざるを得なかった。生きるために。

延命治療拒否同意書は、決まっていないなら絶対に書かないことを推奨しよう、どうしても入院期間中に限っての同意が必要と言われてしまったら、有効期限を必ず記載しようということを推奨する取り組みをしてみた。けれども、解決策ではないだろう。「尊厳あるいのち」を守る仕事の中で、「死にたい」と思わせてしまった社会を変えたい。けれども、自分はまだ何もなしえていない。その中で、善意に満ちたコトバの中に巧妙に入り込んでいるかもしれない「いのちの選別」への嗅覚を研ぎ澄ましていかないといけない仕事でもあると気づかされた時、本当に難しい仕事なのだと今更ながら痛感している。

いのちが大切にされる社会をつくりだす
～尊厳あるいのちについて考える

愛隣デイサービスセンター　ライスチョウ ノア ピンアン

年が明けてしばらく経った後の2月11日、毎年愛隣館では「平和について考える日」として集会を行ってきました。今回のテーマは、愛隣館を含めたイエス団にて設定されている目標「ミッションステートメント2009」の中の「いのちが大切にされる社会を作り出す」を起点として、昨今世の中で起こっている“いのち”にまつわる事件や社会問題を取り上げて、「そもそも“いのちが大切にされる”とは？私たちに何ができるのか？」を考えようと計画していました。

かねてから世の中では生きるという事に理由をつけて、一方的に他者の命に対して身勝手かつ不条理なレッテルをつけることが度々ありました。昔の事で言うと、ナチスドイツがユダヤ人や障害者、同性愛者らを虐殺したこと。そしてあれから70年以上経った今でも変わらず、国会議員がLGBTの方々を「生産性がない」と雑誌上で罵倒したり、元介護施設職員が「障害者はいなくなればいい」と19名の重度の障害を抱える方々を殺傷した事件が起こったりしています。そしてそういった事件が起こる度に、あろうことか「よくぞ言ってくれた」と賛同する声が上がるのです。命が大切にされない社会の闇は、私たちのすぐ隣まで迫っています。

そんな他者から命を大切にされにくい社会の中でも、私が最も悲しくてやるせないのが「自分の命を大切にしたくても叶わない」ことです。

京都市内でALSの女性患者に対する嘱託殺人事件が起こりました。殺された女性は、かねてから病気の進行によって体が動かせなかったり食事ができなくなったりと“出来ていたことが出来なくなる”ことなど障害を抱えながらの生活に苦しみ、「死にたい」と吐露していたと言います。

この事件は現代社会に大きな衝撃を与えたと同時に、私にとっても福祉に生きる人間として「死にたい」と思う人に対して何が出来るのか考えさせられる事件でした。

では、彼女はただシンプルに「死にたいから死なせてくれ」と思い立ったのでしょうか？私は彼女とは生きてきた人生も境遇も違うので想像するしかありませんが、そうは思えないのです。本当の望みは「死にたい」ではなく「この生きづらさを取り除いてくれ」だったと思うのです。

重い病気や障害を抱えて生きることは正直苦労と挫折の連続です。障害と付き合っていく覚悟を決めても、出来ないことが増えていくもどかしさや人の善意によって助けられている事への負い目がついて回ります。街に出た際に時折励ましの言葉を頂くこともあるのですが、よく言われるのは「大変だね」。善意からの励ましも場合によっては悲観的なレッテル貼りに聞こえてしまいます。人間誰しも苦労はあると理解はしていますが、時折「何も心配せず人並みの生活を送ってみたい」と思ってしまう事もあります。

その中でも何とか工夫して出来る事を獲得していったり自分を支えてくれる人と出会ったりと、生き辛いと思う以上の嬉しい出来事によって人生が光っていくのです。

生き辛さを抱えた人に「とにかく生きてくれ」と言葉だけで言うのはとても簡単です。しかしそれだけだとエゴと見なされかねません。言葉で寄り添うと同時に、その人が何に苦しんでいるのか、どうしたらそれを取り除いて再び生きようと思えるのかを、一緒に考える必要があります。その上でさらに、生きたいと思える社会を作っていく事が大切なのです。

今の世界に目を向けるとイデオロギーの違いによって罪のない一般市民が殺されて、その報復としてまたもや見境なしに攻撃や侮辱を浴びせて排除するという悲劇の連鎖が起こっています。連日流れる「何十人が死亡した」というニュースに、ついいのちが大切にされないことへの危機感が麻痺しそうなくらいです。そんな混沌の中でも私たちは「生きたい」と「苦しい」という両方の声に耳を澄ませて、自分たちに何が出来るのかを考えると誓うと同時に、皆さんともいのちについて話し合えることを願っています。

防災キャンプ in むかちゅう 2021

福野由記

向島二の丸学区に住む障がい当事者や二ノ丸自主防災会等が協力して2021年10月20日（水）に「防災キャンプ in むかちゅう 2021」をむかちゅうセンター（旧向島中学校）で行いました。

防災キャンプとは、体験型の防災訓練のことです。台風、水害、地震など、大規模な自然災害が各地で起きており、防災への関心が高まっています。実際に避難所となる場所で泊まる、アウトドア体験や防災クイズなど、防災を楽しく学べるプログラムが全国で取り組まれています。

電動車いすを使用して向島市営住宅で自立生活をしている湯口真さんから「障害者が『ただ助けてもらうだけの災害弱者』にならないために、自分が住んでいる地域で障害者主体の模擬避難所を運営してみたい」とお聞きし、二ノ丸自主防災会会長だった故矢吹文敏さんが「地域の子どもや大人がむかちゅうに泊まって、楽しく、災害時の避難をイメージできるイベントがしてみたい」と言われていたことを思い出しました。

コロナ禍で、学校行事や各地のイベント等がどんどん中止になり、個人の生活でもいろいろなことを我慢しないといけない時期でした。でも、災害はいつ起こるかわかりません。二ノ丸自主防災会の皆さんや伏見区社会福祉協議会、伏見消防署向島消防出張所の方とも相談しながら準備を進め、当日は避難所となる体育館で備品であるダンボールベッドやテント等の組み立てや、アルファ化米のわかめご飯などの非常食の調理や試食を体験することができました。

参加された方からは、「説明書を見ても、組み立て方がすぐに分からなかった」「体温計の電池が切れていて使えなかった」等、実際の避難場所や備品を使用して訓練する必要性や、「これまで地域の避難訓練に参加したことがない人たちが参加してみたいと思える魅力的な避難訓練を企画したい」などの声がありました。

今回は小規模なデイキャンプとなりましたが、2022年度は、子どもたちと一緒に地域の防災について考えたり、野外調理をしたり・・・と防災を通じて地域の皆さんと一緒にインクルーシブ（包括的・排除も隔離もしない・バラバラで一緒）な地域づくりを目指していきたいです。

献金者リスト

ご支援ありがとうございました。今年度も多くの皆様に支えられて活動を続けていくことができました。
今後ともよろしくお願い致します。感謝を込めてお名前を載せさせていただきます。
尚、記入に際しましては万全を期しておりますが、万が一記載漏れがありましたらご一報ください。

84口 ¥743,900（2021/12/18-2022/3/31）敬称略

賛助会名７名 ¥34,000

伊吹寛子，君村千代子，菊地義則，林栄子，松井實・知恵，松野正信・清美，安野喜仁・優美

郵便振替寄付者（個人）¥415,400 48口

秋山眞一郎，池添素，井口和佳，劉梶本雪梅，氏家直子，小國英夫，神谷友之・恭子，梶尾美恵子，川田よしみ，賀川一枝，喜多明子，木村拓貴，木村健治・愛麗，木村良巳，栗原宏介，栗原展子・朗，小西望，小林右奈，澤田茂雄，匿名，鎮目恭輔，清水元介，志賀勉・良子，杉原輝明，髙橋恒太，竹内富久恵，髙橋秀幸，武澤信夫，刀根史恵，同胞の家，石崎蓉子，長尾文雄，中田ひとみ，丹羽克吉，冨士定夫，藤田早紀，朴実・清子，黛正，松本姫子，宮本真希子，南浩子，三吉史倫，村岸冨美枝，村瀬義史，森亮，山内恵美，山口洋介，山本あかり，藪中翔太

郵便振替寄付者（団体）¥111,000 14口

愛之園保育園，石橋教会，桂保育園，軽井沢追分教会，京都丸太町教会，京都教会，京都 YWCA，啓明学院，甲子園二葉幼稚園，神戸教会，西小倉めぐみ教会，枚方くずは教会，翠ヶ丘教会，洛陽教会

その他寄付者（個人）¥86,000 9口

服部昭，丹羽克吉，冨士定夫，黛正，氏家直子，山本あかり，森亮，山口洋介，金耕祐

その他寄付者（団体）¥97,500 6口

ＮＡの会，向島日本語教室，伏見民商，世光保育園，世光教会，伏見区身体障害者団体連合会

新愛隣館建設後の募金のお願い

インクルーシブ社会の実現を！

2021年4月より、新愛隣館に戻ってまいりました。建築費用は、自己資金と借入金のみで賄っております。つきましては、皆さまからのお支えを引き続きお願いしたいと思います。これまでも、多くのお支えをいただいておりながら、重ね重ねのお願いで恐縮ですが、何卒よろしくお願いいたします。

＜寄付金振込先＞寄付控除が受けられます
郵便振替：01020－5－39321
口座名義：社会福祉法人イエス団愛隣館研修センター
＊募金目標額：3千万円

編集後記

●みなさまからのご意見ご感想お待ちしています（さ）

●ロシアとウクライナで戦争が起こっています。人の命が奪われ、生活が破壊される戦争は絶対に許されません。人類は過去に戦争の悲惨さを幾度も目の当たりにし、二度と起こらないように叡智を集めてきていたはずです。日本も過去に今のロシアと同じように隣国を侵略し多くの人々の命と生活を奪いました。その結果、原爆が落とされ、沖縄は戦場とされました。その経験から、命が収奪される戦争は絶対にダメだし、戦争につながる準備もダメです。安全保障の考えから平和に至る道はありえません。ウクライナで起きている悲惨な現実から私たちに問われていることは何なのか。剣を持つもの剣にて滅ぶのです。平和をつくりだす働きを推し進めていきましょう。（ひ）